

「源氏物語忍草」の二写本について

中西 健 治

はじめに

「源氏物語」の近世期の梗概本として一定の評価は得ながらも、あまり研究の進んでいない北村湖春の著した「源氏物語忍草」について、さきに稿者は天保五年刊の版本を底本とし、それに幾つかの写本を対校してささやかな校本めいたものを編んだ（拙著『源氏物語忍草の研究 本文・校異編／自立語索引編』二〇一一年一月・和泉書院。以下、「拙著」と略称）。そのことで「源氏物語忍草」の調査にひとまずの区切りをつけていたのであるが、その後、天保八年の版本や写本を入手することもあって、もう少しだけ関連したことについて言及しておきたいと思うようになった。本稿はそれらのうち、本来は四冊本一揃いであった写本のうちの第二冊目に相当する端本一冊が架蔵となり、その内容の一端を紹介してもよいのではないかと判断するに至った事項について心算え的にまとめたものである。

「源氏物語忍草」の写本は多くが四冊本である。架蔵となった写本一冊はその四冊本であるべきものの第二冊目にあたると判断したのは、他のいくつかの写本のうち四冊仕立てになっているもののうち題簽に四季の名称をもつて区分する写本があることで、該本もまさに題簽に「夏」と記されていることよってである。加えて所収本文が絵合から藤裏葉までの巻を対象として収めていると墨付一丁表の「目録」に示されていることから明らかである。ただし、該本が他の多くの写本と際だって異なっている点は、何よりも本文の傍に細々と朱書の書き入れが多く、また前半には貼り紙もまま見受けられることである。「拙著」刊行に至るまでに調査し得た版本およびわずかの写本類には見られなかった多くの書き入れや貼り紙があることから、「源氏物語忍草」が実際に調査・研究などの対象として使用あるいは活用されていたことがそれらから推測でき、物語原作本文をも参照しながら書き入れているらしいことも注目してよいことかと思われる。該本は近世期の一写本かと思われるが、「源氏物語忍草」が一般に流通す

るようになった天保五年の版本刊行以前に本書の本文がある写本を書き写し、それに後刻、朱書、貼り紙が丹念になされたものであると判断される。同時代に流通していたと思われる版本を書写の際の祖本としていないことは、常夏巻にある源氏と玉鬘との贈答歌のうち、源氏の贈歌一首が版本には見られず、これに對して諸写本には共通して源氏の贈歌が記されている点を明白な根拠としてあげることができるからである。架蔵となった「源氏物語忍草」の端本の概略をひとまず報告しておく。

一 「夏本」の書誌など

架蔵写本一冊（以下、「夏本」と略称）の表紙は藍鼠色の地に円形の龍の姿の空押し模様が散りばめてある。題簽は左に弁柄色で「けむし忍ふ草 夏」と書かれ、冊子自体の大きさは縦二十二・九cm、横十六・一cm、袋綴り、墨付五十四丁で、総合巻から藤裏葉巻までを対象としている。下小口に「シノフ 夏」とあり、和歌は二字下げで次の行に続けて書き、続く地の文と区切らない。半丁十一行、本文は墨書で、朱書きき入れや貼り紙などの他、まれに朱で異本校合などもあるが、虫損箇所も多く判読不可能の箇所もままある。本文は「拙著」の校異編の本文と対照させると、大洲市立図書館本との共通本文が目立つように思われる。用紙は楮紙を用いて綴られて、四穴綴りの本ではあるものの綴り糸は欠けていて、総じてかなりくたびれている感のある本でもある。

る。また本文と朱書とは別筆のようでもあるが、決定的なことは言えない。

墨付一丁表に「目録」として所収巻名を上下一行ずつに次のように記す。／は改行を示す）

「絵あはせ 松かせ とうす雲 あさ顔 乙女 玉かつら
／ほたる こてふ かり火 常なつ みゆき 野分
／まき柱 ふちはかま 藤のうら葉 梅かえ」

この巻の掲載順については、五行目にあたる「ほたる」から九行目の「梅かえ」までは各行の巻順が上下逆になっており、加えて本文はあるにもかかわらず「初音」の巻名が見当たらないというように、実に不可思議な標記になっている。目録標記からみる限り、「源氏物語」に親近感を持っているのか疑わしく、また、そのように記された理由については不詳としか言えない。

二 「夏本」の和歌について

「源氏物語忍草」には「源氏物語」所収歌の約四十三%にあたる二百六十一首の和歌（写本）があるが、「夏本」には総合巻から藤裏葉巻までの八十一首を収めている。「源氏物語忍草」が他の梗概書と異なる点は和歌にことさら注目し重視した書き方をし

ていないことである。ただ、本文を比較検討するに先だつて、物語本文を通覧する際の一つの指標として存在する和歌表記に注目し、その本文についてみておきたい。「拙著」の底本である版本と校合してみると、仮名遣いの異同等などはしばらく措くとして、おおよそ次のとおりに分類できる。まずは数字で示す。

A 「夏本」と版本との間に異同箇所のない和歌数

総合	1	松風	4	薄雲	3	朝顔	1
乙女	2	玉鬘	3	初音	2	胡蝶	1
蛭	2	常夏	1	篝火	0	野分	0
行幸	2	藤袴	0	真木柱	4	梅枝	3
藤裏葉	4						計33

B 「夏本」と版本とが異なる本文で朱書訂正が版本と同じ本文の箇所（一首のうち複数も）

総合	1	松風	0	薄雲	0	朝顔	2
乙女	0	玉鬘	0	初音	0	胡蝶	0
蛭	1	常夏	0	篝火	1	野分	0
行幸	4	藤袴	5	真木柱	1	梅枝	2
藤裏葉	1						計18

C 「夏本」と版本とが異なる本文で、朱書訂正がない箇所

総合	0	松風	1	薄雲	1	朝顔	0
乙女	3	玉鬘	0	初音	1	胡蝶	1
蛭	0	常夏	*	篝火	0	野分	1

「源氏物語忍草」の一写本について

行幸	1	藤袴	0	真木柱	1	梅枝	0
藤裏葉	1						計11

（*常夏巻は版本が一首を脱落させている。「はじめに」参照）

「拙著」の校異編でも明らかのように、本文の類別は大きくは版本と写本とに大別される他には、写本を子細にみれば幾つかの系統に分類することは可能ではあるが、特段に異本と称し得る本を見出すことは難しい。右の数値からも「夏本」も他の写本・版本と相並んで大きく異なつた和歌本文を有しているものではないことが読みとれよう。

ところで、「源氏物語忍草」の和歌に着目した数少ない論考に足立宏子氏の「『源氏物語忍草』の和歌―梗概化の方法―」（『市民大学院論文集・三』二〇〇八・三）がある。足立氏は「源氏物語忍草」の和歌が「湖月抄」をもとにしていないこと、独自の語句が見られること、中世の注釈書や梗概書に近い本文のあることなどを詳細に論じ、「和歌そのものの鑑賞を越えて、梗概化した文章の一部を担って『物語る』ことを備えているから」であろうと述べられ、さらには、「源氏物語忍草」の本文や引歌にもその傾向がみられるようだとの見通しを含めて論じられていて、貴重な見解であると思われる。足立氏が中世・近世の源氏物語梗概本として検討の対象にされた「源氏物語忍草」を含む七作品のうち、氏の作成された一覧表に従って「源氏物語忍草」の和歌のみが「源氏物語」のそれとの異同がある六十一例について、「夏

本」に該当する十八例の箇所ではどのようなになっているかをみると、「夏本」のみの本文（乙女巻・「かけていへは」や篝火巻の「ふた方に」の下句「わが身はなれぬかけごなりけり」の「我が身」と「かけご」の交替を朱書で記す例はありながらも、多くが「源氏物語忍草」版本と同様な本文で傍らの朱書に「源氏物語」の本文が記されていたのである。つまり、「夏本」に朱書を施した人物は、和歌については「源氏物語」本文を参酌しながら確認をしたうえで朱書したのではないかと思われ、そのことは和歌の表現により注目していたことの証ではないかと考えられるのである。和歌の観点からのみ見ることは一面的ではあるが、初発に記された「夏本」の和歌本文を閲するにあたった次代の書写者は朱筆を採りながら特別な注意を払わなかったとは言えないのである。このことは「夏本」全体の性格を探るうえでひとつの材料になる。

三 貼り紙について

例えば松風巻を例に記す。「源氏物語」松風巻で、源氏が二条の東院を作り、西の対、東の対にそれぞれ花散里、明石の君を迎えようとする記述は「東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにしおかせたまふ」（②三九七・新編日本古典文学全集による。以下、「源氏物語」は本書を使用）から始まる。「源氏物

語忍草」も「二条院の東のたいは源の御座所、西のたいは紫の上の所なり今は源も紫の上も一つにおはしませば我御座所のひがしのたいを普請しかへて花散里明石其外手をかけ給ひし人々を住さんとおぼす」からはじまる。この冒頭「二条の院の東のたいは」（「夏本」とある「二条の院」の右傍には「源の御家」と朱書があり、続く「西のたいは紫の上の所也」の「所」にミセケチで「御方」と朱書する。また、「我御座所の東のたいをふしんしかへて」の「ふしんし」にミセケチで「つくり」と朱書している。「普請」を「つくり」と置き換えているのかと思いきや、すぐあとに「手をかけ給ひし人々を住さむとおほしつくりはてければ」の傍線箇所をミセケチにして「すふしんてきぬ」と朱書して本文に当て嵌めるようにしている。この例ひとつだけで朱書全般の意図を推測することは難しいが、語句の言い替えや説明を付して、本文をより分かりやすくしようとしているのではないかとはいえぬ。明石入道の「行くさきをはるかに祈るわかれ路にたえぬは老の涙なりけり」（②四〇三頁）の和歌の直前に細々した朱書を次のように入れている。

「例の後夜よりおきてはな打ならし行ひ共して名残をおしむ又逢へき別れならねは明石の御方もいみしう悲しと思へり入道」

「源氏物語忍草」は梗概本ではあるが、引用場面の情景について

は詳しく説明を付加した箇所であらうかと思われ、朱書を施すことによって明石入道夫婦の別れの場面が物語として十分に濃密な箇所であると考えての朱書注記であらうと思われる。同様に考えられる例として、少しあとに出る「身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く」という明石の尼君の歌に応える明石の御方の歌が、「源氏物語忍草」においてはこの歌をもつて巻の名とするという文言以外に無いのだが、「夏本」では、明石の御方の歌一首「ふる里に見し世の友を恋ひわびてさへづること誰かわくらん」を引き、「など云明し暮すに源氏わたり給ひて姫君を見給ふに」との文言を加えた墨書の貼り紙を挿入し、ひとつの完結した物語の場面であることを示しているようである。このことは「源氏物語忍草」の叙述に満足できないと判断したか、あるいはこの場面の「源氏物語忍草」の描き方に付加しようと考えた書写者が、より状況を円満に示そうとしたためではなかったかと思える。もちろん朱書の書写者と墨書の書写者が同一であるとは限らないうえに、他の何らかの外的要因も加わっているのかも知れないことを考慮しなければならないことを含みながら、一つの写本に筆を加えることがいかなる意図のもとになされるかを推測するときに、先の朱書と同様もしくは類似の思考がなされたのではないかと考えることは許されるのではないかと思うのである。

そこで、いま先に触れたものの以外の貼り紙を四例紹介しよう。ただAとCには朱書が添えられている。

A 朝顔卷

「装束のしほたれてかたちの見苦しさに見給はぬかとの給へはなれ行こそうき事多けれとてうちそむきてふし給ふ御さま見すて、行かたけれと今宵参り給はんとし給ふ女五の宮はきのふまでもすちとこそ思ひ侍るにかくねんころに女五の宮へも申遣し給へは」

B 朝顔卷

「桐壺の帝はけんと源の内侍かたはふれを御らんして□^ふことにてあれとわたらせ給ひしかなとまこへて今も心はわかやきて□□□侍

としふれと此契りこそわすられねおやの親とかいひしひとこと

とうとましく御らんしてけん

身をかへて後も待みよ此よにて親を忘るゝためし有やと」

C 乙女卷

「源

かけきやは川瀬の浪も立かへり君かみそきのふぢのやつれを

折あはれなれば朝かほの斎いん

ふちころもきはきのふとおもふまにけふはみそきの瀬にかわる世を」

D 乙女卷

「あらは世おとろふ末の世に人にかかるめられあなつられなん
猶さえを本としてやまと魂の世に用られつひの世のおもしと
なるへき□しのみにて」

Aはつぎにあげる「源氏物語」の原文を参照しながら参考本文を
貼り紙としていることが明らかである。

塩焼き衣のあまり目馴れ、見だてなく思さるるにやとて途絶
えおくを、またいかが」など聞こえたまへば、「馴れゆくこ
そげにうきこと多かりけれ」とばかりにて、うち背きて臥し
たまへるは、見棄てて出でたまふ道ものうけれど、宮に御消
息聞こえたまひてければ、出でたまひぬ

②四八〇頁

これは紫の上の心配をよそに、女五の宮邸に出かける源氏と紫の
上のやりとりの場面で、貼り紙は原文をできるだけ分かりやすい
ように碎いて説明を施して補っているように見える。二人の微妙
なやりとりは原作の文章を必要としたのではないかと思われる。

Bは「源氏物語忍草」本文には無い。女五の宮邸で尼となった
源内侍に久々に会って、往時を思い出しつつ贈答歌を交わす場面
である。新編全集はこの場面は、「いわば幕間狂言」的であると
注するように、贈答歌で纏まっている一挿話である。これを一場
面としてまとめた箇所であることを説明するために和歌を中心

に抜き出して補足しようとしているのである。

Cも「源氏物語忍草」には無い。乙女巻の冒頭に源氏が前斎院
朝顔の姫君を思い出して歌を贈り、姫君がこれに応えるという場
面があり、「源氏物語忍草」ではこの経緯についてのみに触れて
いる。Cの貼り紙は、その事情を贈答歌を掲げることによって一つの場
面を添えることになっている。「かけきやは」の歌の右にさらに
朱書で、「文は紫の紙たて文にて藤の花につけ給へり」と添え、
朝顔の姫君の返歌「ふぢころも」の歌の右傍下にも「淵瀬岸の字
立入りたる哥也」と解説を付している。源氏から贈られた歌の紙
などの様子、また朝顔姫君の歌には縁語のあることが説明されて
いるように、贈答歌についての補充的な文言があることから、B
やCの貼り紙の意図が明らかに和歌に関心を寄せた者の加筆であ
ることが明白になってこようし、同時に朱書も又、同様な視点か
らなされていると思しい。

Dは夕霧の教育についての源氏の言。「源氏物語忍草」にも源
氏の教育論は触れられているが、「大和魂」を用いて学問の重要
さを述べる箇所を特段に貼紙の形にしていることは、この貼り紙
が特に重要だと考えたものの所業によっているかと思える。かな
り飛躍したことかもしれないが、講釈の場、あるいは何らかの教
育的な場にあつて用いられたのかも知れないと思うのである。

いずれにしてもこれらの貼り紙は、「源氏物語」の該当箇所を
たんなる場面の梗概として扱わずに、より幅広く説明を要すると
捉えての措置であつたと考えられるのである。

四 朱書き入れについて（一）

先にも述べたように「夏本」には実に夥しい朱の書き入れがあり、二、三節で一応の見通しは述べた。つまり、「源氏物語」の本文を時に参照しつつ、平易に説明を必要とする場面で適宜、朱を入れているらしいのである。例えば和歌の解釈であったり、「源氏物語」本文であったり、主語や目的語を記入したり、さらには語句の補足的な説明を加えたりという、かなり自在な朱書を施しているのである。それらは一体なぜ必要であったのか。今のところ、稿者としてはおそらくはこの本文を用いて講釈をするときに手許に置いて補助的に用いるためではなかったかとの推測をしている。時に原作に及ぶのは当然としても、その物語的な場面について言及したとき、当該場面の具体的状況を補足するための心覚えとして記入することがあったのではないかと思われる。梗概本である場合にはとくにそのことが要請され、単なる梗概として話の展開をのみ必要とされたものではなかったのではないか。「夏本」の朱書き入れはそのことを如実に示しているのである。いま具体的にいくつかの事例を示そう。薄雲巻にも朱書は多い。明石の君が源氏のすすめに従い、娘を手放す場面をあげる。

二条院へつれてゆき紫の子にせんとおぼせど明石離れがた
く悲しみ給へばさすがにささえし給はで（*）此姫君のはか

まぎはいかにし給ふべきとあかしへ源よりの給ひつかはしける

〔拙著〕一〇八頁

*の箇所「夏本」では次のような長い朱書がある。

「（明石の御方）ためらひておはす明石の御方も故ならぬ身にそへ奉らすはか／＼しき事も有まし（以下、貼紙）其内にもし此子の上の御はらに姫君出来たまは、いよ／＼いせひおとるへしとおもひきりて養子につかはし姫君の御ためよろしきやうにこそせめと思ふ折ふし」

これは明石の君が姫君を手放す決断にいたる悩みを補足的に語句を補いつつ説明していることになる。また、引き取られた姫君が紫の上になつところ、「源氏物語忍草」では次のようにある。

紫の上にとよくなづき給へば美しきものえたりとおぼして
いとをしかりいだきあつかひもて遊び給ふ

〔拙著〕一一〇頁

引用文末尾の「給ふ」の右傍に朱線を引き、「夏本」には次のような朱書を記入している。

「明石の御方いかにつれ／＼ならんとおほして年の内に忍びて源おはしましたり御文なともさい／＼遣し給へり」

これは源氏が明石の君への配慮をどのようにしていたかを「源氏物語」から要点を捉えて記入していると思われる。源氏が大井を訪問する際に紫の上が中将の君を遣わして歌を贈り、源氏が返歌する場面がある。

源あすかへりこんとの給へばむらさきの上

舟とむる遠方人のなくばこそあすかへりこんせなと待みめ

〔拙著〕一一〇頁

この場面、「源氏物語」には次のようにある。

「明日帰り来む」と口ずさびて出でたまふに、渡殿の戸口に待ちかけて、中将の君して聞こえたまへり。

舟とむるをちかた人のなくはこそ明日かへりこむ夫と待ちみめ

いたう馴れて聞こゆれば、いとはひやかにほは笑みて、行きてみて明日もさね来むなかなをちかた人は心おくとも

〔②四三九頁〕

これは「源氏物語忍草」にも贈答の場面として二首共々に採られ

ていて、紫の上の贈歌の後に「夏本」には朱書で次のようにある。

「と中将の君といふ女房を御使にて追掛ていはせ給へはほほあみて」

原作と比較すれば明らかのように、朱書は紫の上の贈歌の状況とそれに対する源氏の表情を併せて書きこんでいるのである。「源氏物語忍草」では、「大井にて姫君の事ども語らせ給ひ二三日逗留して帰らせ給へり」（一一〇頁）とあるが、「夏本」の朱書は「本文には二三日ともなし」とあり、原作には逗留期間に関する記述のないことを指摘している。これは明らかに原作の本文を参照していることを示しているのである。また、夜居の僧を常に帝の側に居るようにと命じたことで冷泉帝が源氏と藤洩との秘事を知ることになるのだが、これに相当するところを「源氏物語忍草」では「源のの給ふにより伺公せられけるか人もなくしづかなる暁に帝の御前に参りて」（〔拙著〕一一一・一一二頁）と記している。この「伺公」の傍に朱で「夜昼侍りする」と書き加えている。これなどは明らかに語句の注であろう。朱書き入れにはこの類も多い。また、「入道の宮御事顕れぬやうにと此僧都に御祈をたのみ給ひしに」（〔拙著〕一一二頁）と、秘事の漏洩を恐れ、隠すようにと依頼する「此僧都に」の右傍に「忍ひ給ひて」と朱で書き加えている。これらはいずれも、物語の展開に沿って書き

入れたものである。薄雲巻のなかでも息詰まるような場面を「源氏物語忍草」がどのような朱書を施しているのか、主なものを用しておこう。

○夢の心ちせさせ・↓しはし物をも聞へさせ給へす／（夢の）やうに思召すかくと告す□親を見くたし罪ふかき身なるへきによくしらせしと仰ある

○かしこまりたる御もてなし也↓うやまひたる御もてなし也源氏はかしこき御心なれはいかにしてきこし召つらんとあやしかり給ふ

○式部卿のみや↓そののち／桃園式部卿源ノ伯父權斎院ノ父○世の騒しきを思し嘆きて↓源きりつほの帝の御弟源の御伯父也は、き（、）あふひの巻の式部卿と同じ事也かく人々多くかくれたまひて世もさわかしく

○ほのめかせ↓ある時

○位をゆつらんと↓御（位）につき給へときこえ

○うけひき給はねば↓（「ば」ノ右下二）帝はひなく思す

○さう車ゆるされ↓（ゆるされ）て出入し給ふをみかとはあかすとも御覧す

○禁中へ↓内裏のうへは

【玉鬘】

はや舟をかまへ姫君をのせ奉り（132）

は、と豊後の介と兵部卿君といふ娘なと御ともにて夜ふけいて、

○出入りする↓を牛車ゆるさるといふ

○総合の巻↓に帝へ参り給ひ斎宮をおほしつ□／てさふらひ給ふに御さとは源氏の御方也此頃二条の院へ

○いろ／＼のはなしの序に↓御物語ともし給ひて

○いづれを面白く思すと↓御心の引かたに聞置侍りて庭のけしきに作て御覽せさせんとの給へは

○秋こそ↓いと、あはれに催され

「夢の心ちせさせ」から「秋こそ」までは「夏本」のわずか十六行分に相当する文であるが、朱書の細やかさに注目されると同時に、この朱筆の加筆作業の現場に思いを致すときに、物語に対する真剣な読解を心がけようとしている者の密密たる息遣いが感じ取れるのではあるまいか。

五 朱書き入れについて（二）

「夏本」には朱のごく短い書き入れも夥しく存在している。いまその中でも比較的文字数の多い書き入れを、とくに、玉鬘十帖に絞って取り上げておき、参考に供したい。上段に「夏本」の本文（拙著）の頁を数字で記す、下段に朱書本文をあげた。

姫君のめのとにいか、といへはへたて (134)

内大臣殿へしらせ奉り給へと (134)

艮の町にすませ給ふ (135)

二条院の東のたいに住む (136)

【初音】

ふるとしの物語聞え給ひて (139)

物きよげに住なし (139)

【胡蝶】

源をはじめ中宮へ参り給ふ (142)

中宮なとは二季に (142)

御かへし中宮 (142)

此哥ゆへ岩もる中将ともいふ (143)

【蛩】

源わたり給ひ座敷をつくろひ (146)

【常夏】

内大臣の御娘 (150)

【篝火】

源玉かつらにわたり給ひて庭に篝ともさせて (154)

近くよりふし給ひて (154)

御中よくてかくあそび給ふ (154)

【野分】

此まくの内におはしますとてかへり行て

早くさいはひ有やうにて

かくて渡らせ給ひしよりけんわたり給ひて対面有り

に置給ふすゑつむ花も同所に住給へりこの人々へも

共こまやかに(聞へ)かはし

万つけにくしく

(中宮)へ参り給ふ此中宮は

イニ四季

也とは、ゑみて御覽して御返し

(この哥)より柏木を(山岩もる・)

玉鬘へわたり給ふて座敷

近江君

(頭書)内大臣の脇はらの姫君也下主近く育上しなり／近江君の歌無心所着の詠

様此巻にあり／中納言も又此体をよめるはわざとよみたる也

ともし火のちかきはあつかはしとて近くせ

琴を枕にしてふし給ふ

むつましふし給へり

庭に秋の花色くを尽して (156)
風の訪らひに (157)

【御幸】

雪深き・・・たづねよ (160)
かくれ給はゞ玉かつらも (160)
女の本装束を着する (161)
袴のこしを男女に (161)

【藤袴】

大宮かくれ給ふ事は (164)
玉かつらも御服なりと (164)
思ふ一筋を (164)
たづぬるに・・・かごとならまし (165)
春宮は朱雀院の御子なり (165)

【真木柱】

玉葛は思ひの外に (168)
若君二人をつれ (171)
(末尾)

これらを総括して見るに、語句そのものの注釈というよりも、物語の文脈の解釈に重きを置いた朱書き入れであることが見て取れよう。特段に古注釈を引用したりはせず、物語の展開を丹念に

只今は中宮と申奉る此方の御庭に
御見まいに伺いたり

源御使をもてなさせ給ひて御かへし
玉葛の□にも御は、なれば御服有へし
(「る」ノ下二)に幸有らせんに
イニはかまのこしをゆはする事なれば此文き、安し

此卷大宮の御服にて玉葛も夕霧も
服をを着給ひしと有にて隠れ給ふをしる也
きこえんとらにの花の面白きをもち給ひて
らには菊の花也哥には藤はかまとよむ也
明石の巻にしやうかふてんの女御の御はらに二つに成り給ふ若宮有と有し是女御
の兄なり髻多く有故に髻黒大将と云。今の帝には御おひなり

ひけこく男らしきかたちなれば (左傍二)「イニうるさかりて」
車にのせて
其年の十一月に玉かつらは若君をうみ給へり

解き明かしていこうとする、いわば学究的姿勢よりも、より真摯な姿勢で物語本文に臨んで納得できるように読もうとしているように思えるのである。右以外の実に多くの、人物や目的語、助

詞、語句説明などの丹念な朱注の書き込みはそのことを明確に裏付けていよう。ただし、常夏巻の近江君の歌についての注「近江君ノ歌也。歌体無心所着也」は「花鳥余情」に言う「今案此歌の所詮はいかてあひみんの七字にあり 大方歌の体はすゝろ事をいひつらねたるへし 万葉に無心所着の歌の体と申へきにや」(『源氏物語古註釈叢刊』(二)(二二二頁)に通い、藤袴巻の蘭の注記に「哥には藤はかまとよむ也」とある文言は「湖月抄」所引「源氏物語抄」の注にも通うことから、朱の注記が和歌の詠みぶりにも配慮がなされているように見え、その他の細々した注記も和歌の箇所集中していることは明らかである。わずかな数例をもって即断するのは危険ではあるが、あるいは歌人、連歌師、はたまた文芸に関心を寄せる文人の所業であつたとは考えてよいのではないかと思うのである。

おわりに

北村湖春は父の著した「湖月抄」から多くを学び、「源氏物語」読解の空気を継承しているはずである。(近年、宮川真弥氏の北村季吟に関する一連の研究、例えば「伝北村季吟筆『源語秘訣』と箕形如庵宗乾」(『語文』百四輯)などにも具体的に言及されている)。「源氏物語忍草」の写本の奥書にも、「湖月鈔なんまことに末の世のおろかなるを追びくこと更なるもの也。されど婦女のまどひ童蒙のたよりにはまた覚束なきことも多かるべし。さるを

此しのふくさは、季吟の息湖春したしき尼公のせちなるもためにいなびがたくてとていと耳ちかく心得やすきやうに、一まきく「耳近きことば」を用いながらも「源氏物語」の趣を崩さないやうに心がけた梗概書として今日も評価が高いが、その価値を見抜いて自身でも読み解こうとした人物が確かにいたのであつた。その方法は、語句の注釈というよりも、物語そのものを読み解きながら、文脈に重きを置いたものであり、注記が和歌の詠みぶりに配慮がなされているように見え、また、その他の細々した注記も和歌の箇所集中していることから、「夏本」への加筆者は、あるいは歌人、あるいは連歌師、はたまた文芸に関心を寄せる近世文人で源氏物語と真摯に向き合う姿勢を有している者の所業であつたと考えてよいのではないかというのが今のところの結論である。偶然に架蔵となつた一冊の写本が伝えるメッセージは案外小さくないのではあるまいか。

(なかにし・けんじ 本学特任教授)

【「夏本」の朱書きき入れ、貼紙】



写真1 (7ウ、8オ)



写真2 (11ウ、12オ)